

徳島県にし阿波地域

平成28年度
認定

にし阿波の傾斜地農耕システム

四国中央部の「にし阿波」と呼ばれる徳島県西部の山間部では、場所によっては斜度40度にもなる急傾斜地で、段々畑のような水平面を形成せずに傾斜地のまま農耕し、風雨などで起こる土の流出を草地で採取した敷き草（カヤ）を畑にすき込むことで最小限に抑え、そば等の雑穀や伝統野菜に山菜、果樹など少量多品目を組み合わせる複合経営により、山間地の環境に適応した持続的な農耕が行われています。

400年以上にもわたり、この農耕システムが継承されてきたことにより、採草地の多様な動植物や焼畑農法の流れを汲む、日本の原風景ともいえる山村景観、保存食への加工や食文化、そして農耕にまつわる伝統行事なども人々の手で守られ継承されています。



1



2



3

1 ツチアゲの様子 2 鍛冶による伝統農具製作の様子
3 そばを粉にせず、実のままで食べる郷土食「そば米雑炊」



1



2



3

1 システムを形成する風景（愛媛県八幡浜市）
2 次世代を担う人材の育成「高校（柑橘）で初のGLOBAL G.A.P.取得」
3 スリランカにおける柑橘栽培技術支援「えひめ・スリランカオレンジプロジェクト」

愛媛県南予地域

平成30年度
認定

愛媛・南予の柑橘農業システム

全国トップクラスの生産量と日本一の品目数を誇る愛媛県の柑橘農業において、南予地域はその屋台骨を担う一大柑橘産地です。複雑に入り組んだ海岸線一帯に広がる、他に類を見ない急傾斜地に拓かれた柑橘園地は、壮大で独特な景観を形成しています。労働の負担を減らすために段々畑を作り、防風垣を設置することで海からの塩害リスクを軽減するほか、高い栽培技術や様々な品種の適地適作など、持続的に経営するための工夫やノウハウが存在しています。

生産者が結束して主体的・戦略的な産地づくりを進める「共選」組織など、独特の社会基盤やストックが存在し、過酷な条件下での小規模家族経営による経営の継続と高い収益の確保を実現しているほか、次世代育成や労働力の確保、海外への技術支援や国際的な認証取得にも積極的に取り組んでおり、世界に誇る応用可能な農業システムとなっています。

宮崎県日南市

令和2年度
認定

造船材を産出した飢肥（おび）林業と結びつく 「日南かつお一本釣り漁業」

九州南部の小さなまち宮崎県日南市。近海には黒潮が流れ、市域のおよそ8割が森林、うち7割が飢肥（おび）杉の人工林です。近海かつお一本釣り漁業の漁獲量は、四半世紀にわたって日本一となっています。当地域のかつお一本釣り漁業は、およそ300年前、紀州藩から当地域に漁法が伝わったとされています。漁獲効率よりも、かつおの資源を守ることを優先した伝統漁業で、釣り・魚群探索・漁具作製などの昔ながらの技術が受け継がれています。このシステムは、藩政末期から昭和初期頃まで造船材に特化した杉の人工造林を行った歴史を持つ飢肥林業と絡み合って発展し、広大な飢肥杉の山々の恵みを伝統漁や地域の中で利用しています。

当地域では、飢肥杉林から流れ出た栄養塩が育む豊かな漁場から、伝統漁、漁村内での飢肥杉利用、海と山の結びつきを感じさせる信仰、風習、食文化まで、かつお一本釣り漁業を核とした循環が形成されています。



1

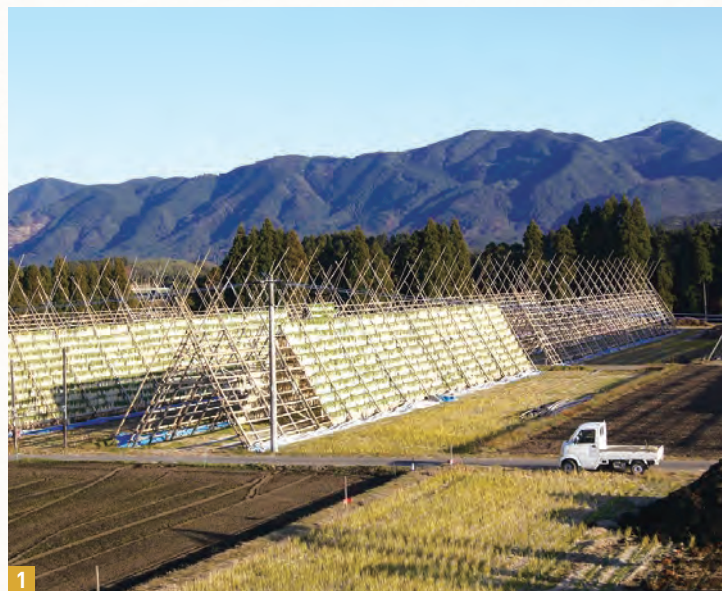


2

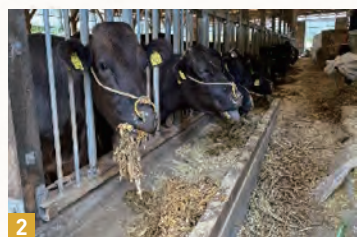


3

1 日南かつお一本釣り漁業の風景 2 伝統料理「かつおめし」
3 目井津漁港正月のかつお船と飢肥（おび）杉林



1



2



3

1 「大根やぐら」が林立する風景 2 干した大根の葉を食べる牛の様子
3 納屋で営巣するツバメ

宮崎県田野・清武地域

令和2年度
認定

宮崎の太陽と風が育む「干し野菜」と 露地畑作の高度利用システム

江戸時代後期に自然災害の備えとして始まった「干し野菜」は、時代の流れと共に「干切大根」と「干し大根」生産に変化してきました。特に「干し大根」は、風土を最大限に活かし、大根を丸ごと一本干す方法が伝統的に継承されています。

本地域の農業は、気候風土を最大限に活かし、年間を通じた作付体系と「干し野菜」の技術を多角的に組み合わせた露地畑作の高度利用システムとして発展してきました。温暖な気候、豊富な採餌資源、農家の営みが相まって越冬ツバメが生息しやすい環境が守られています。

先人が残してきた風俗、習慣、知恵は、洗練された貴重な文化財として今も脈々と受け継がれています。雨乞いの太鼓である「雨太鼓」や「神楽」など、農業にまつわる伝統文化は、地域のコミュニティ形成、絆づくりに役立てられています。